

第17回新生匠瑳戦略会議 会議録

開催日時：平成24年7月5日（木）

午後7時00分～8時40分

開催場所：八日市場ドーム選手控室

出席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃、渡辺新

（団体推薦者）宇野充紘、萱森孝雄、橋場永尚

（一般公募者）大塚榮一、岡田陽子、永野亮太、林暁男、八木幸市

（11人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）安藤建子、越川竹晴、越川八代枝、鈴木和彦

（4人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）小川課長、大木副主幹、富井副主査（3人）

1 開 会

2 あいさつ（省略）

3 議 事

（1）提案書（中間報告）について

[議長]

1週間くらい前に事務局が私のところに来まして、戦略会議らしい報告書が欲しいということで、ちょっと考えていました。前回指摘された部分については、まだ修正していませんので、それはこれから直していきたいと思います。今回提示する中間報告は、6章として21ページから24ページまでを新たにつけ加えました。これは飯高を中心にしたものですが、普段私が考えていたことをベースに書きました。23ページに図を挿入し、これまでのA委員やB委員の考え方と整合性を持たせるようなかたちで書いています。本日はこれを検討していただきたいと思います。では、事務局で6章の朗読をお願いします。

（事務局で6章の本文を朗読。）

[議長]

B委員、いかがですか。

[B委員]

後半の「飯高小学校跡地問題から学習すること」というところがポイントで、戦略会議が客観性を持って語れる場だとすれば、結果はどうであれ、旧飯高小学校に対する対応の仕方には反省すべき点があったのではないかと思いますので、そのことが中間報告に入っていることは好ましいことだと思います。

[議長]

A委員、いかがですか。

[A委員]

グリーン・ツーリズムというのは非常に便利な言葉で、ブルー・ツーリズムやエコ・ツーリズムなど、ツーリズムを使った言葉はけっこうあります。グリーン・ツーリズムという言葉が入っていることにより、わかりやすくなることもあれば、陳腐なイメージを持たれる可能性もあるので、そうならないように注意する必要があると思います。

また、私は具体的に物事を考える習性があるので、例えば、旧飯高小学校で中間支援組織というと、市民のサポートセンターの拠点になるようなイメージになりますが、特別支援学校ということになると、それと連携することでグリーン・ツーリズムが活かせる、というように具体的に書いてしまうのも一つの手だと思います。しかし、前回も議論があったように、中間報告は考え方や仕組みづくりの段階で留めておき、具体論まで踏み込むべきではないという意見もありましたので、どこでラインを引くかという立ち位置の問題だと思います。

[議長]

私もよくわからないところがありますが、C委員の話を聞いていると特別支援学校との地域交流は難しいという気がしますが。

[C委員]

先入観もありますが、現在、平和地区にある特別支援学校で地域交流が行われているかといったらそうでもありませんので、そういう現状を考えると難しいのではないかと思います。

[議長]

以前、県から示された計画の中に、地域交流ということていくつか書いてありました。これで地域交流と呼べるのかという議論をしたと思いますが。

[C委員]

交流したとしても、餅つき大会とかそういう付き合いしかありません。

[議長]

D委員の職場では、御輿を出したりしていますよね。しかし、地域交流にはほど遠いのですよね。

[D委員]

イベントを開催しているときは、周辺の子どもたちもやってきて地域交流になっていると思いますが、それ以外にはあまりありません。

[議長]

この問題は非常に難しいと思います。普段、C委員が話していることは、すごく気持ちわかりますが、これも言い過ぎると差別や偏見と言われてしまう場合があります。

[C委員]

八日市場学園とは、祭りなどでずっとお付き合いがありました。やっていくうちに段々変化してきて、現在はもう祭りもやめてしまったらしく、地域からもアクションを起こしにくくなってしまいました。特別支援学校のことも、開校当初は何らかの交流があったとしても、最終的には交流がなくなってしまうのではないかと思います。

[議長]

病院も含めて新たに加えた部分について、中間報告に載せることはいかがですか。私自身しっかりきていないところもあって、たとえ中間報告で「J T跡地に市民病院を」と書いたとしても、市の決断材料にはなりません。所詮、他人ごとの意見だと思います。現在、E委員が出席されている病院のあり方検討委員会へ、病院の新築について提案したとしても、それが決断材料になるのでしょうか。例えば、旭中央病院は新たに建て替えましたが、それには相当な決断が必要だったと思います。市の執行部だけで判断できたのでしょうか。議会でも無理だったと思いますし、どこかに決断させるだけの力が働いているのだと思います。J T跡地に市民病院と言うのは簡単ですが、この決断はなかなかできないのではないのでしょうか。

[E委員]

あり方検討委員会でも、どちらにせよこのままではジリ貧になってしまうのは確実です。このまま修繕を続けてお金をつぎ込み、10年後にダメになってしまうのなら、ここでやめるか、それとも次につなげるために建て直すのか、その結論を出した方がいいだろうと思っています。あり方検討委員会では財政的なことはわかりませんが、地域のために、病院が生き残るためには新築以外の方法がない、という結論にはなっています。旭中央病院の場合は300億円近い金額で、市民病院とは額が違いますが、

地域医療再生基金からの支援や、行政にしても市だけではなく、県や国レベルでのバックアップがあったのだと思います。

[議長]

市民病院ではそういうバックアップが受けられそうですか。

[E委員]

大学から医師を派遣してもらえるとということになれば、バックアップは受けやすく、決断もしやすくなると思います。現在の診療報酬でも、医師が確保できて且つ頑張っ
て働いてもらえれば、まず赤字にはならないというのが私の持論です。過去にそれで赤字を解消してきています。医師の考え方がサラリーマン的になってきているということもありますが、そういう医師ばかりでもありませんので、千葉大学で千葉県の医療に対してどれくらいの危機意識を持ってバックアップ体制をとるか、資金的な面よりこちらの方が大きな問題だと思います。

[議長]

いずれにしても、現在の市民病院の場所はよくありませんよね。

[E委員]

J T跡地に新築すれば、利便性は向上すると思いますが、今度は駐車場の問題などが出てきますよね。あり方検討委員会では、新築の方向で結論がまとまると思いますが、新築するかしないか、新築するとしたらどこに建てるのかということは、最終的に行政の判断になると思います。

[議長]

F委員、いかがですか。

[F委員]

特別支援学校の地域交流というと、運動会のチラシがあちらこちらに貼られているのを見かけるぐらいしかありません。現在の状態ですと、それ以外の交流というのはないのかもしれませんが。グリーン・ツーリズムということですが、自然環境の良いところに特別支援学校の生徒たちがせっかく来るわけですから、この自然を活かして地域とのつながりを持ってもらいたいと思います。特別支援学校の話が来たときには、すでに県は戦略会議で議論している内容を知っていたわけですね。ですから、計画の中にも地域交流や博物館的なスペースの提供など、そういう内容があったわけです。その部分に関しては、県もダメとは言わないと思います。元々飯高を含むゾーンは自然や文化を活かすような位置づけになっているわけですから、それらを活かすかたちで特別支援学校との地域交流を図っていく必要があると思います。

[議長]

C委員の活動は、今後どのように考えていますか。

[C委員]

飯高の子どもたちは、夏休みになると学校の校庭でバーベキューや花火大会などをやっていますが、来年からはどうなるのかという話も出ています。市でも貸し出しはおそらく可能だろうというイメージがあるくらいで、貸し出すといっても責任者は誰になるのか、実際に学校が開校になってみないとわからない部分があり、今までよりは借りづらくなるだろうと思っています。市へ問い合わせても、まだ県の方ではっきりしないのでわからないというのが正直なところだと思います。

[B委員]

はっきりしないというのは、教育委員会と県がやりとりしているからということですか。それとも市と県の交渉があまり進んでいないということですか。

[事務局]

4月に県との打ち合わせを行いました。これまで地元から受けた要望などは、そのときに県へ伝えてあります。まだ正式に貸借契約の申し入れを受けたわけではありませんので、現状ではそこまでの詰めはまだできていません。

[議長]

以前からA委員もおっしゃっているように、やり方によっては特別支援学校との地域交流は可能なのでしょうか。

[事務局]

こちらから県へ要望はしましたが、それに対してできる・できないなどの回答はまだ頂いていません。

[議長]

D委員の勤務先に来るボランティアは、はっきりとした目的意識を持った人たちですよ。団体で来るような人は、義理で来る人が多いということはないですか。

[D委員]

団体によってはお断りさせていただく場合もあります。

[議長]

C委員の普段の発言が、実態を表していると思います。特別支援学校の側からもそうですが、地域の側からも特別支援学校にアプローチしていくのはなかなか難しいと思います。

[B委員]

先ほどF委員がおっしゃっていたように、A委員がおっしゃっていたグリーン・ツーリズムというキーワードで展開するかどうかは別として、理想論を先に言うと、ここ

に特別支援学校が来て良かったということになるわけですよ。閉鎖的であったり、交流が少なかったりという部分を、匝瑳市でやったからできるようになったということが言えればいいわけですよ。それが戦略的であるということだと思いますが、地元で迷惑になってしまえば、提案する意味がないと思います。開かれた特別支援学校にしていくということが地元で迷惑にならないければ、開かれた運営がされるようにこちらからしかけていく、そして開かれた運営がされていく、それが迷惑でないとなれば、戦略会議の中で提案して中間報告の巻末に入れておくのは、J T跡地の提案よりは意義のあることだと思います。

[A委員]

23 ページに委員長が作成した図がありますよね。ここで一番重要なのはグレーの部分で、これを曼荼羅だとすると、この曼荼羅を現実に落としこんだときに、どういふ世界が見えてくるかが重要です。それを病院バージョンで見るとこうなる、旧飯高小学校バージョンで見るとこうなる、というような書き方をすると、良い補論になると思います。例えば、内なる伝道師としてF委員やC委員がいて、ヨソ者視点の伝道師はまだ現れていませんが、もしかしたら特別支援学校や外部のNPOの中にもいるかもしれません。誇りある文化を讃え合うとすれば、飯高檀林があるし、多くの農産物があります。また、諦めごととして耕作放棄地があるし、このように飯高に置き換えて書いてあげる、病院に置き換えて書いてあげることで、曼荼羅が生きる補論になるわけです。委員長の書き方はそういうものになっています。

[議長]

以前、C委員の話では、飯高檀林においてヨソ者視点の伝道師がいたわけですよ。

[C委員]

八日市場学園も元々は農業体験を生徒たちにさせていましたが、職員も大変になってしまって、現在はおろそかになっています。そこに農家が加わっていれば少し違っていたと思いますし、そこで採れたものを農協に出荷しようかという話までいったこともありました。特別支援学校でも、農家が加わって、遊びがてらに農業体験などで交流を図っていけば続くかもしれません。畑を貸して先生だけでやろうとしたら、生徒の面倒を見ながら農業をやることになるので、まず続かないでしょう。農地はたくさんあるので、協力してくれる人が見つければ、そういうかたちで交流していくことは可能だと思います。

[議長]

特別支援学校のスタッフにも、地域と関わっていこうという意識はあるのでしょうか。

[C委員]

どういふ先生が来るかはわかりませんよね。

[B委員]

実態としては意識の問題より、面倒を見なければならぬ生徒の数に対して教員の数少なすぎるから、とてもじゃないけれど手が回らないのだと思います。危険を回避するだけで手いっぱいというのが実情ではないでしょうか。どこまで許されるかはわかりませんが、外に出てきてもらおうと同時に中にも入っていかなければ成立しないということです。普通学校に特別支援学級がある場合、教員を補助するために、お手伝いする人をその地域で雇ったりしています。そういう支援体制を地域で提供するので、バーターでその代わりに外にも出てきてもらい、こちらの中にも入っていくという、お互いに要求しあう関係を作っていくないと、前には進まないと思います。

[議長]

これまでの特別支援学校のあり方としては、地域との関わりという観点からは失敗かもしれません。今後、地域との関わり方によっては、ひょっとしたらうまく地域交流ができるかもしれません。

[A委員]

ノーマライゼーションの動きがあつて、校内に閉じ込めておくのはどうかという意見もありますので、地域で支える特別支援学校があつてもいいし、先入観だけでできなかったということもあるかもしれません。できるかどうかではなく、地域がどうしたいかということが大事だと思います。行政の仕事だとやる・やらないで終わってしまいますが、もう少しそこを考えていくというのが内なる伝道師とヨソ者視点の伝道師のコラボであり、それがチャンスとなるわけです。

[議長]

D委員の報告を聞いたときに、それは非常に難しいと感じました。施設から外へ出したとしても、地域に溶け込むまではいきません。

[D委員]

そこまではいきません。障害者は障害者同士で、地域の人とは地域の人同士で、比較的似たようなグループが出来てしまいます。

[議長]

旧飯高小学校に、特別支援学校が出来るとは間違いないわけですね。

[事務局]

市で受け入れますという回答は、3月にしています。

[議長]

今後、飯高で地域づくりを考えたときに、特別支援学校抜きには考えられませんので、それはまた新たな考え方が必要になってくると思います。

さて、本題に戻りますが、補論を載せることについてはいかがですか。

[B委員]

前回のおさらいですが、自分の意見としては否定的な立場でした。ただ、全体的に補論は載せた方がいいのではないかという意見が大勢を占めていたという認識があり、そのことに異論を持つ気分ではなく、今日は載せることを前提に話が進んでいくものと思っていましたが、いかがでしょうか。

[議長]

委員長の判断で、載せることを前提として、これをどう改良していったらよいかという視点で協議を進めたいと思います。先ほどのA委員の意見や、F委員から発言のあった特別支援学校のことは加えた方がいいと思います。

[B委員]

特別支援学校については、制度的にしっかりしたとらえ方になっているかどうかチェックをされてはいかがですか。病院については、以前意見書も出していますし、しっかりキャッチアップが出来ていると思われませんが、千葉県の特別支援学校がどのような運営を展開しているのかをちゃんと整理しておく必要はあると思います。

[議長]

飯高に特別支援学校ができるという話は、匝瑳市全体に知れ渡っていますか。

[G委員]

議会だよりには載っていましたよね。

[C委員]

飯高地区ではみんな知っていると思いますが、他の地域ではあまり関心がないのかもしれないですね。

[E委員]

平和地区にある特別支援学校と、周辺との関わりはどのようなのでしょうか。

[H委員]

運動会やお楽しみ会などのチラシが回覧板で回ってきます。私は生徒さんが作っている肥やしを買いに行ったりはします。生徒さんも何か一生懸命やれることがあった方がいいみたいです。

[C委員]

生徒によって障害のレベルが違うので、作業も難しいですよ。

[H委員]

自分でバスに乗って通学できるような生徒は、ある程度指導すれば、そういう作業もできるようになるみたいです。民間の会社でも、特別支援学校の生徒を受け入れて仕事をお願いするところもあるみたいです。

[E委員]

そういう場合に補助金が出ますよね。

[C委員]

自分の仲間にもそういう人を雇って、畜産や植木屋などで単純作業をお願いしている人はいます。ただ、障害のレベルにもよるので、全員が受け入れられるかどうかは難しいですよ。

[議長]

ただ、補助金はずっと続くわけではないので、補助金が切れた段階で雇用も打ち切るといった問題がありましたよね。

[I委員]

今まで皆さんの話を聞いてきた中で、交流やボランティアで地域が関与するだけだと弱すぎる部分があって、どうも長続きしない気がします。何か商行為に発展するようなお金が動くような仕組みを作っていないと、成長もしないのかなと思いました。栃木の足利というところに、障害者を雇って山を開墾してブドウを作り、事業として成功しているココ・ファームという会社があります。そこで働いているのは20代～60代の障害者で、ある意味では厳しく使っていますが、その人たちがお金を稼ぐという喜びまで結び付けていて、現在では観光地にまで発展しています。これをグリーン・ツーリズムととらえていいのかわかりませんが、こういう方法もあります。

[議長]

特別支援学校の話はこのへんで終わりにして、とりあえず中間報告の中では、市がそういう選択をしたこと、そこから学ぶべき地域づくりの方法を指摘するに留めてあります。F委員が先ほど言っていたように、交流の手法として地域の自然や文化を生かした関わり方など、そこを考えていきたいと思います。

後は、グリーン・ツーリズムという言葉は使いましたが、地域内での交流だけではなく、都市と農村交流、もうちょっと広い意味での市外との交流で、里山や檀林を考えたいと思います。よくわからなかったのは、ふれあいパークの経営形態についてです。ふれあいパークは成功している事例ですよ。

[C委員]

当初は組合で、現在は株式会社です。私は3年半、事務局長として働いていました。なぜ株式会社にしたかという、組合だとお金を一切持つてはいけないという縛りが

あったので、従業員の保証ができなかったからです。例えば、売り上げが落ちたときに、ストックがないと給料が払えないという事態になってしまいます。当初は都市と農村の交流の場であって、販売を中心に考えてはいけないと言われていましたが、それだけではダメだと思っていましたので、販売にも力を入れていました。行政からもいろいろ言われましたが、最初は従業員の半分くらいは、臨時職員ということで市から派遣してもらっていました。しかし、1年たったら全て自分たちで給料も払いなさいということになって、それには稼がなければいけないので、売り上げ重視にシフトしていきました。現在もそのスタイルは変わっていないと思います。

[議長]

ふれあいパークに人が集まる要因は何でしょうか。

[C委員]

私たちが力を入れていたのは、地元の農家が農薬問題に真剣に取り組み、まじめに物を作っているということが最大のウリです。一時は全ての生産者の写真を掲載していたこともあり、品質よりもまず安全を第一に考えました。多くの人が買ってくれる要因としては、安心感があるということではないでしょうか。

[議長]

消費者にとって、生産者の顔が見えるわけですね。

[C委員]

しかし、あまりにも基準が厳しいということで、生産者から反発はありました。物を持ってきたとしても、農薬を使っているかどうかわからない物は全て売らせませんでした。

後は、ふれあいパークは若者が来てくれる場所ではなく、お年寄りが来てくれる場だと考え、お年寄りが作った物をお年寄りが買う、そういう場でいいんだということで、生産者も年金暮らしで、あまり欲をかかないようにと言ってきたので、比較的野菜などの値段も抑えることができました。

[議長]

設立は行政主導で行われましたか。

[C委員]

市の産業振興課が中心になって出品者を募集しました。野菜、加工品、植木、花木など、当初150人くらい集まりました。

うまくいった要因としては、現在代表を務めているJさんという人が、当時、農協を中心に「女が起こす企業」というものを全国で展開していて、それにぴったりはまったからです。全国でも、女性が何人か集まっていろいろな活動を展開していて、そ

れを農業新聞などで取り上げてもらうなど、ふれあいパークもその流れにうまく乗ることができました。

[議長]

現在は地域の物産の販売だけですか。

[C委員]

販売だけでなく、体験事業も行っています。

[H委員]

食堂もありますよね。

[G委員]

月に10万人、年間120万人が訪れます。年商は7億円近くまでいっています。

[I委員]

生産者は出資することで出品できるわけですよね。その人たちが株主になっているということですか。

[C委員]

株主は市が50%、組合が45%で、その他が5%です。

[I委員]

私が聞きたかったのは、例えば、個人農家がふれあいパークで野菜を出したいと思ったときには、会員になるか出資金を出すかすれば出品できるわけですよね。出資金については、個人の名前で株主になっているかどうかという質問です。

[C委員]

株式会社に移行したときに私は辞めてしまったので、そこまでは把握していませんが、おそらく個人ではなく団体で持っているような気がします。

[K委員]

後から加入した人は、出品したときの手数料が違うという話を聞いたことがあります。

[議長]

先ほどのC委員の話で、交流というのは地域内交流ですか。

[C委員]

市外との交流です。農業体験や里山ハイキングなどを行っています。里山ハイキングは年2回ぐらいやっていますが、150人くらい人が集まっているようです。

[議長]

なぜその話をしたかというのと、「里山・檀林ふおーらむ」を開催したときに、地域交流の視点から、里山・檀林とふれあいパークを結び付けたいと発言していた人がいま

した。これをきっかけに何かできないかとずっと思っていました。ふれあいパークの理念として、当初、都市と農村交流の場であると先ほど言っていました。それは現在も変わっていませんか。

[C委員]

変わっていません。行政的にもふれあいパークは「都市と農村総合交流ターミナル」という位置づけですから、もちろん販売も行ってはいますが、できるだけ交流事業も展開していこうという考えは変わっていません。

[議長]

まだ単体だけの活動のような気がするので、できればターミナルにしたいと考えているのですが。

[C委員]

生産者にとって余裕がないというのも事実です。毎日、野菜を作って出荷作業をしていると、農業体験などの時間に回す余力がありません。そこで会長から、飯高小学校が閉校になったので、そういう人たちをそこで扱ってくれないか、という話は前からありました。体験作業をさせられる人たちを確保しようかという話をしたこともありますが、話は途中で終わってしまっています。

[議長]

学校がなくなったとしても、里山や檀林がありますので、ふれあいパークと連携して何かできそうですよね。

[C委員]

ふれあいパークも新たなお客を増やしていくためには、いろいろな活動を展開していかないといけないと思っています。他の直売所では、芋ほりなど大々的に事業を展開していますよね。

[議長]

先ほど、無農薬の話で生産者に厳しくしてきたと言っていました。それで生産者の意識は変わりましたか。

[C委員]

かなり勉強したと思います。特に直売所などは、抜き打ち検査があり、そこでひっかかってしまい新聞等で取り上げられたら即座につぶれてしまいます。そういう意味では、かなり意識は変わったのではないかと思います。

[議長]

地域づくりを進めていくときに、人が集まって何かしていると、地域が活性化しているように見えるのですが、生産や構造の側にも変化がないと、本当の意味での地域

づくりにはなりません。

[C委員]

まずは、生産者の意識を変えなければという考え方でスタートしました。農協などは色や形を重視しますが、ふれあいパークは大きくても小さくても、本当に良い物は形にはこだわらないという売り方をしています。悪い見方をすれば、ごみみみたいなものも売っていると言われたこともありました。小さく形の悪いものでも味は良いということで、選別はあくまで自分ですから、ロスは少なく済みます。

[議長]

ふれあいパークのあり方を見ていると、生産者の意識も変わっていますよね。野菜地区に昔から無農薬にこだわっているLさんという人がいますが、そういう人たちは独自の販売ルートを持っていますよね。

[事務局]

都会から人を呼んで、無農薬にこだわって自分で販路を拡大しています。

[議長]

まだ空想の段階ですが、飯高地区の里山で出る枯葉や枝と、市内の有機農業などを結びつけるのは難しいのでしょうか。

[C委員]

それは生産者の気持ち次第で、難しいことはありません。

[議長]

以前、干潟で牛に口蹄疫（こうていえき）が出たとき、それ以降やらなどを使って循環型の農業を始めましたよね。そういう大きな構造まで変えてしまうようなことができないのでしょうか。K委員、いかがですか。

[K委員]

食べ物で一番大事なことは、見た目や味より安心・安全です。先ほどの口蹄疫の話も、自分のところでわらを使って、他からあまり買わないようにすることでリスクを回避するわけです。これから日本の農産物は減っていくと思いますので、自給率が徐々に下がっていく中で、海外産の安い農産物にどう対抗していくかが課題となります。日本の農家としては、安心・安全が唯一の強みなのです。

[C委員]

現在の飯高の農業を見ていると大きな問題があって、それはこれからの農業をどう存続させていくかということにつながります。農地全体の狭さ、個々で所有している農地の狭さなどの問題があり、干潟のように1町歩単位での区画はとてもできない場所なので、そうであれば観光面などで何かできないかという思いはあります。現在、

飯高にとってはある意味農地が邪魔になってしまっています。将来子どもに預けられないので、今のうちに売ってしまおうという人がいて、買う人は産廃目的であったりいろいろな人がいます。そういう問題を飯高は抱えています。

[議長]

飯高の里山問題を解決していくときに、農業問題を抜きにしては考えられません。

[K委員]

飯高では担い手は少ないのですか。

[C委員]

0に等しいと思います。学校がなくなった理由はそこにあります。

[議長]

長野や群馬など、飯高よりもっと山間部にある地域でも、地域で活性化しているところはありますよね。

[K委員]

そういう地域は補助金が入っている場合があります。農地が狭くて大型機械が使用できないようなところは、国から補助金が出ています。

[議長]

補助金だけでは活性化できないので、何か工夫があると思います。

[K委員]

そういう地域の人、本当に困っている、県などのバックアップ体制もかなり整備されています。

[C委員]

飯高の人は本当の意味で困っていないかもしれません。商店街の議論でもそういう話が出ましたが、飯高の農家はそうなのかもしれません。本当に困っていれば、何らかの動きが出てきてもいいはずですよ。

[D委員]

そういう中でも、F委員やC委員など、何かやりたいという人はいると思いますが、そういう人たちを中間報告のしくみ図に当てはめていったときに、どこにどう働きかけていったら実現できるのか、それが見えてくればもう少し動きが出てくるような気がします。個々でこうしたいと思っても、そこまで終わってしまっていて、その思いを拾い上げて、一つの大きな動きとしてまとめられていないのだと思います。

[C委員]

飯高の現状はまさにそうですね。オープン・ガーデンをやったり、個々での活動はそこそこやっていますが、それをまとめて支援していくような仕組みにはなっていま

せん。行政も広報などの支援はしてくれますが、個々で始めているだけにどの程度関わっていいものかという判断が難しいのではないのでしょうか。

[議長]

A委員やB委員が作成してくれた図を使って、飯高はいろいろ考えることができる地区だと思います。ただ、病院はあまりにも切羽詰まっていて、この図に当てはめるのもできないような気がします。そこで、病院の補論部分の出だしを少し変えようと思っているのですが。

[B委員]

補論を入れる方向性については反対していませんが、補論で言おうとしている内容は、あくまでも基本的考え方の図の具体的展開例を表しています。その展開例として取り上げているものは、大いに期待を込めているものです。それは、市の医療機関のあり方、もしくは飯高地区のあり方を展開するくんだりではなく、もし病院や飯高にアプローチするとしたら、ある人たちが知恵を絞って、それらの情報を共有し、それが大きな運動に発展していった結果として何かが生まれるのであって、さすがにそこまで留めておく必要があると思います。前にも言いましたが、市の病院が存続するためには、市民がみんな市民病院に行くようになれば、問題は解決するはずですが、答えはわかっているのに、それができないことに問題があると気づいたので、こういう議論をしているわけですね。これは、飯高地区においても同じことで、地区民がみんな特別支援学校に行き地元との交流を希望し、行動を起こしていけば、全国でも有名な匠瑳モデルの特別支援学校になると思います。ただし、行動が起こるきっかけやフレームがないので、現状に至っているわけです。医療や飯高のあり方に踏み込まずに、補論を成立させることが最大のポイントになると思います。

[議長]

結局、戦略会議でやってきたことは、そのフレームを作ることでした。そこに具体例が欲しいということで、現在のかたちになっているのですが。地元の人にとっては、ある程度具体的なところまで触れてほしいという考えがあるのかもしれませんが。

[B委員]

先ほどD委員が言っていたのは、具体例とは言わないまでも、具体例に近い展開の方向性について、別の方向性があるのではないかという意見として理解していました。先ほど委員長が問いかけられたのは、J T跡地や飯高について、一つの答えに近いものとして何か欲しいのではないかという問いかけだと思いましたが、D委員は、基本的考え方の図を動かしていく具体的な装置が用意されていれば、市民も動きやすいと思うので、その装置の具体的イメージを提示してはどうか、という意見だったと解釈

していますが、いかがでしょうか。例えば、ここで言っている中間支援機能というものについては、仮称〇〇センターというものがあって、そこには相談や学習機能があるというような具体化も一つの方法としてあるのではないかと、そういうことを言いたいのだと思いました。

[議長]

例えば、地域活性化伝道師としてB委員は内閣府から派遣されていますが、民間でもそういう派遣をしているところがありますか。

[B委員]

おそらく民間ではないかもしれませんが、国では総務省が地域おこし協力隊を積極的に推進しています。事前申請が必要なく、今年度事業を行ったとしても、来年度の特別交付金でその分の費用が補填されるという制度になっています。

[議長]

中間支援者として地域の人材を確保するときに、そういう制度を積極的に利用した方がいいですね。

[B委員]

民間事業として、地域を活性化する人材を派遣するビジネスは全国にたくさんありますが、ビジネスといってもその仕組みだけでやっているのであって、けっして儲かってはいません。

[議長]

事務局は、B委員をどのように見つけたのですか。

[事務局]

総務省や内閣府など、国から送られてくる文書やホームページを通じていろいろ探しました。

[議長]

伝道師の関係で、先ほどC委員は歯科医師の方との出会いがあったということで、それは偶然かもしれませんが、今後地域づくりを進める上で、ある程度計画的に内なる伝道師を育成したり、ヨソ者視点の伝道師とのコンタクトを計画的に図ったり、そういうことが必要になってくるのではないのでしょうか。

[B委員]

J T跡地の関係で前にも話したことはありますが、鋸南町では公共施設を売りに出し、それを元リーマンブラザーズに務めていた証券マンが買って、そこをスポーツ旅行のメッカにしようと活動しています。こういう活動をしながら、一方で役場の人と相談したり、道の駅と連携したりするなど、活動が次々と広がっていています。ど

ここにどんなきっかけがあるかわかりませんが、意図的に仕掛ければありうることです。J T跡地も暫定的に商業利用が可能であれば、ここを拠点として中間支援機能のようなものやってみようという人やグループを募集すれば、日本財団などもこういう活動に助成してくれますので、市の力を借りずとも、きっかけというのはそういうところから生まれてくるものだと思います。これはA委員の御専門になるかもしれませんが、現在の状況で支援センター的なものを作ろうと思ったら、必ず市でやることになってしまいますので、それは結局他人ごとで出来上がっていく支援機能となり、それでは意味がありません。そうしないように気をつけなければなりません。

[A委員]

やはり概念ではなくて、何かを起こすというトレーニングを通じて、試行錯誤していくしかないと思います。そのきっかけとして後方支援を行い、事業が終了した後にその事業をどのように残していくのかを検証しながらやっていく、そういう取組みは全国でされています。若者・バカ者・ヨソ者という人たちが自分ごととしてやっていく中で、多くの人を巻き込んでいくというスタイルを、実践の中で積み上げて行くことが重要になってきます。そういう試行錯誤を繰り返していく中で、何年か後に花が開いている状態に巡りあえるのだと思います。

[B委員]

宣伝します。7月15日(日)に東京の日本財団ビルにおいて、地域イノベーター養成アカデミーキックオフイベントというのがあります。私はそのアドバイザーをしているのですが、地域イノベーター養成アカデミーという講座を半年かけて行います。その受講希望者たちに対するオリエンテーションみたいなイベントです。ただ、受講希望者だけでなく一般の人でも参加できます。今回、全国で16地域が受け入れ地域になっていますが、その16地域で活躍しているプロデューサー的役割を果たしている人が集まってくれて、自分たちの活動内容や、受け入れ側として可能な支援内容、相手方に期待することなどを、実践を通じて勉強してほしいという説明会です。こういう場にぜひ参加してください。

[議長]

では、時間もなくなってきましたので、まとめます。

本論の文章については、これまで指摘のあった箇所は修正します。補論については、先ほどF委員やA委員から意見がありましたが、その他に何かありますか。

[出席委員全員]

ありません。

[議長]

では、今回の中間報告をベースに修正し、事務局で特別支援学校の制度的なことをつけ加えてもらって、出来上がったものを一度皆さんにお送りします。それで問題がなければ市へ提出したいと思いますが、そういう手続きでよろしいでしょうか。

[出席委員全員]

異議なし。

[議長]

では、なるべく早めに提出できるようにしたいと思います。議題でその他の部分で、事務局から何かありますか。

(2) その他

[事務局]

事務連絡をさせていただきます。

まず、次回会議の日程ですが、資料にお示しのとおり7月30日(月)で、午後7時から匝瑳市役所議会棟第3委員会室で開催いたしますので、よろしくをお願いします。

また、その次に「最終報告に向けた今後のビジョンについて」ということで、中間報告については、先ほど委員長からも御説明がありましたが、今回の会議でとりあえず議論は終了となります。皆さんの委員としての任期は、今年の11月までとなっております。今後、最終報告を見据えた中でどういうスケジュールで会議を進めていくか、委員長のお考えもあると思いますので、一度共通認識を図っておく必要があると思います。

最後に、今回の会議録の確認については、順番でG委員、C委員をお願いします。連絡は以上です。

[議長]

それでは時間になりましたので、本日の会議はこれで終了となります。

[事務局]

ありがとうございました。

4 閉 会